

安井稔著 (1977)

『この道を歩く』(開拓社)

1,800円

郡司利男編 (1983)

『庭前の梧桐』(開拓社)

〔非売品〕

原口 庄輔



『この道を歩く』と『庭前の梧桐』は師弟の関係にある安井稔筑波大教授と郡司利男筑波大教授の還暦のお祝いの一環として刊行されたエッセイ集である。それぞれ独自の趣きと味わいをたたえた、興味ある書であり、得るところの大きな知恵の泉である。

「ことば」の専門家による、ことばの使い方の二つのお手本であると言ってもよいであろうし、味わい豊かな安井語録・郡司語録の集大成と言ってもよいと思う。

『この道を歩く』は求道的香りがほのかにただようエッセイ集である。「この道」というのは「学問の道一筋」ということである。題に著者の信念と姿勢がくっきりと映し出されている。

戦前からのリベラリストであり、学者にとってはつらく悲しい、「失明」の危機に何度かさらされ、その都度乗り越えて生きてきた著者は、疑いもなく意志の人である。しかも、今なおやわらかでのびやかな精神を保っており、人を育てる達人でもある。

『この道を歩く』には、著者が四〇年に亘って書きたててきたエッセイが収められており、一言一言に、学問をする上で、また、人生を生きる上で有益な知恵がこめられている。

例えば、本を読むとはどういうことをかを説いた一文は、「本の読み方」ではなくて、「本のよこし方」となっている。そのわけは、「時間を掛けて読むべき本を、まさに時間を掛けながら読む最上の方法が、本をよこしながらから読むことである」というところにある。よこし方とその効用について読んでいるうちに、よこしながらから読むべき本を、どれ位読んできたかということが、おのずから反省させられるのである。

「とにかく暇は大事である。大事すぎて何に使うのも、もったいない。」というくんだり

を含む「暇の効用」という一文は、とかく忙しいわれわれにとつて、重要な警告である。「勉強している時間が同じであれば、暇な時間の多いの方が行末伸びる。」というくだりは、アルバイト・パートタイム等で大切な暇を切り売りしている者に、これだよいかと考えさせずにはおかないであらう。

『卒業論文』と題する一文では、よい卒論（に限らずあらゆること）を仕上げる際に重要なことは、「時間をかける」ということであると述べている。これは、アイデアを発酵させるということが重要であるということと同時に、かけた時間にいろいろと考えをめぐらせることが、積りに積もって膨大な量の蓄積となるからである、という。

このような言葉は、すべて著者自身が身をもって実践し、折にふれて学生に示してきたものである。その一言一言が心にしみ込む重みと不思議な説得力をもっている。

『庭前の梧桐』というエッセイ集は、人間郡司利男を語るという趣きの書である。編者みずからの手になる自画像と、いろいろな時期に交遊のあった歴々が、ユーモアと学問への情熱のカタマリのような郡司利男像を鮮明に描き出している。

山奥の小学校を出たのち、編者が貧しさをものともせず、学問への情熱の火をたやすことなく燃やして生きてきた様子が鮮か

に、ユーモラスに語られている。下手な「成功物語」を読むよりはるかにおもしろく、学問をする上で、また、人生をいかに生きるべきかを考える上で、きわめて有益である。

編者は小学生の頃「授業時間に用を足したくなって、机のところでズボンもさるまでも脱いで出ていったところ、みんなが大笑いしたが、なぜ笑われているのか、さっぱりわからなかった。」という反面、あの戦争中に学徒動員でかり出されたながら、「死んでたまるか」と知恵をしぼった、というように、人とは違う視点から物事の本質を見ることが出来る人生の達人であり、マルチ人間である。このような編者の手になる本書が人生や子育てのヒントにならぬ方がおかしな位である。

本書はもともと非売品であるが、仲間うちで終わらせるにはあまりにもおしいので、あえて取りあげた。幸い残部も多少あり、御希望の方には郵送料・手数料等を含めて千円を添えて申し込んでいただければ、おわけできると思う。（申し込みは左記まで。）

305 茨城県新治郡桜村並木2丁目103-102

原 口 庄 輔

なお、編者の郡司利男氏には、『三等学部長』（こびあん書房 2000円）というシャレたエッセイ集もある。あわせて一読をおすすめしたい。

（筑波大学）